

理事長からのご挨拶

令和4年6月から、特定非営利活動法人つなごの理事長を務めることになった曾我智史と申します。前任の野口善國理事長から引き継ぐことになりました。前任が築き上げたものを承継していく重責を感じております。

さて、私たちは、平成29（2017）年5月に設立し、同年9月に子どもシェルターこころんハウスを開設し、令和2（2020）年5月に自立援助ホーム江井ヶ島はるるんハウスを開設しました。この間、子どもシェルターで受け入れてきた子どもの延べ人数は180名を超えます。また、自立援助ホームで生活してきた子どもも延べで21名となりました。

法人設立以来、物心両面にわたり、いろいろな人に助けていただきました。関係者のみなさまには、この場を借りてお礼申し上げます。

私たちの社会的使命は、その設立趣意書に記載されています。

「子どもたちが安全かつ安定した環境で安心してその心身を健全に成長発達させていくことは、子どもたちが私たち大人に対して求めることのできる固有の権利であるとともに、それに応えるのが私たち大人の責務であると考えます。」

「私たちは、福祉、医療、保健、心理、教育、法律などの各分野の専門職を含む市民によって構成されます。私たちはその専門職と連携をとりながら、子どもの固有の権利に応えるという責務を実践しつつ、子どもたちに対する社会的養護を積極的に実践する主体となることに、自らの存在価値を見いだします。」

私たちは、自らの存在価値を「子どもの固有の権利に応えるという責務を実践」し、「子どもたちに対する社会的養護を積極的に実践する主体となる」ことに見出しています。設立当初から振り返ると、そのような存在になりたいという思いのもと、スタッフや子ども担当弁護士が一丸となって、日々奮闘してきたと思います。

今後も、特定非営利活動法人つなごは、自身の存在価値が何かを自問自答しながら、その社会的使命を果たすべく、子ども支援の実践を続けて参ります。法人運営は決して容易ではありませんが、より一層、質の高い支援実践を展開していくよう努力を重ねて参ります。

今後ともご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

理事長 曽我智史

ミニ講座のご報告

『シェルターでの生活について』

■2023年10月26日（木）18:30～20:00
■@オンライン 参加者 23名
講師：國富さとみ氏（弁護士、NPOつなご運営委員）
國富さんは、まず、こころんハウスでの子どもたちの生活やスタッフの声、子ども担当弁護士（こたん）の活動を説明した後、数年前にこころんハウスを利用したAさんにインタビューした内容を紹介しました。Aさんは、「（シェルターに行くことになった時）行き場所があることに安心しました。大人のスタッフさんがいつもいて人間らしい生活ができました。シェルターで暮らしているうちに“生きてる方が辛い”という気持ちもなくなっていたので、強くなれたと思います。」と話してくれたとのことです。最後に、國富さんは、シェルターの役割として、身の安全の確保、心身の休養、生活の立て直し、親との関係調整、次のステップへ、を挙げました。

『子育てと心理的安全性』

～家庭の中で子どもとはぐくむために～
■2024年1月19日（金）18:30～20:00
■@オンライン 参加者 14名
講師：國重真由美氏（児童家庭支援センター「そだてサポートひかり臨床心理士」）
「児童家庭支援センター」とは全国に約170カ所、兵庫県内に10カ所設置されている児童虐待予防、再発防止のための専門機関で、國重さんは、臨床心理士として、日々、子どもや保護者からの相談を受けています。國重さんは、その経験を踏まえて、家庭の中での心理的安全性とは「大人が子どものために守るべきもので、家族全員の人権が保障されていることが大切、家族全員がお互いに自由に考えや意見を言える関係」などと説明しました。そのうえで、家庭の中で心理的安全性が脅かされていると子どもの虐待につながる危険性があること、対応する支援者は「家庭や子どもに先入観を持ちすぎない、相談者や家族を尊重して関わる、バウンダリー（境界）を守る、良い面に着目する」などを心掛けることが大切だと話しました。

こころんハウス通信

こころんスタッフ〇より

～子どもと年末年始～

コロナウィルスの感染拡大も落ち着いてきた2023年。コロナ渦では行えなかった季節ごとのイベントをシェルター内でも行うようになりました。

子どもたちの好きなイベントが盛りだくさんの12月。テレビはクリスマス特番で音楽、バラエティ番組でいっぱいになりチャンネルの争奪戦が巻き起こります。

クリスマスイベント特集のテレビを観ながら「本当だったら彼氏と焼肉行く予定だったのになあ」「私は友達とイルミネーション見にいく予定だった。」とそれぞれのシェルターに来る前の予定について語り合っていました。虐げられる危険性のない安全地帯で、生活の環境をより良いものに整えるためと言えど、シェルターにくる前の日常と違ったクリスマスを送らざるを得ない彼女たちのストレスを考えながらスタッフもモヤモヤを抱きつつ話を聞きます。

以前の日常と違うならばシェルターだからこそできるイベントをとスタッフ一同考え今年は子どもたちとクリスマスケーキ作りを行いました。ホットケーキに生クリームをたっぷりかけて一人ひとりが自分たちのケーキをデコレーションしていきます。最近体重増加からダイエットを意識していた子も“今日は特別”ともりもりに生クリームをかけたケーキを何枚も平らげていました。ケーキを食べ終えた後はささやかなプレゼントをスタッフから渡しました。さらに嬉しいことに今年はいただいた配分金でミュージックコンポ、録画機を購入することが出来ました。これでテレビのチャンネル争いが起きることも無くなりスタッフも一安心。「最高のクリスマスプレゼントだ！」と子どもたちも大喜び！

そんなクリスマスを終えたお正月。

こころん、はるるんでは配分金で購入したおせちが食卓を彩ります。

しかしコンビニ飯やジャンクフードに慣れている子どもたちは「おせちって煮物ばかり。煮物とか昔のご飯はシェルターの普段の食事で食べられるから今更いいよー。味の濃いカップラーメンが食べたい。マクド食べたい」と不満顔です。シェルターでは毎日スタッフが健康を考えながら食事を作るので子どもたちからすると味にパンチがなく物足りない献立もあるようです。そんな中1人の子が「おせちって今後一人暮らしした時に自分じゃ絶対買わないし作らないと思うんです。だからここで食べられてよかった。おせちの中の食べ物は苦手だけど文化的な食事に触れられる機会があって嬉しい」と呟きました。そんなことを思っていたとはスタッフも驚き、他児らも「確かにおせちの食材が縁起物から由来してるってここでおせち食べないと知らなかつたかも。人生に一度だと思うと悪くないね」と笑っていました。

子どもの中には「クリスマスプレゼントなんて貰ったことない。」「クリスマスもお正月も関係ない。親から叩かれる日か叩かれない日なのかが重要だ」と語る子どももいます。

それぞれの子どもたちが今後の人生で年末年始を迎えるたびシェルターでのイベントを少しでも思い出して貰えればいいなあと願うばかりです。

おせち、録画機、更にコンポをNHK歳末たすけあいでいただいた助成金で購入させていただきました。ありがとうございます。

